

絨毯を見極める

杉村 棟 (すぎむら とう)
国立民族学博物館名誉教授



民博で開催された絨毯展「絨毯——シルクロードの華」(1994年)の展示場風景

シルクロードの華

気候が温暖なわが国は中東の絨毯と無縁に思われがちだが、じつは海上貿易によつて早くから中東の絨毯がはるばる運ばれていた。京都の高台寺には豊臣秀吉が着用したとされる陣羽織が所蔵されている。そして驚くことに陣羽織の素材になつているのが、一六世紀ペルシアの高価な絹の織物である。さらに、京都の夏の風物詩、祇園祭の山鉦を飾っている懸装品のなかに華やかなペルシア絨毯やトルコ絨毯が使われていることは意外に知られていない。筆者の絨毯への関心はここから始まったといつてもいいだろう。

本来、絨毯は西アジアや中央アジアの生活に欠かせない実用品で、上は王侯貴族から一般庶民に至るまで広く使われてきた。なかには芸術的薰り高い工芸品のレベルにまで達したものもあり、そこに織り出されているさまざまな文様は多くを語っている。つまり、多種多様な意匠にはイスラームの世界観や美意識、さらには多くの民族独自の伝統文化まで映し出されている。絨毯の世界がいかに奥深いものであるかを如実に物語っている。しかも華やかで万華鏡を

思わせる千変万化の文様は、博物館資料として展示効果がひじょうに高い。ここから民博の絨毯収集はスタートして、これまでにおよそ三〇〇枚の絨毯とその関連資料が収集された。それは質、量ともに日本一といつても過言ではない。

変わりゆく遊牧社会

トルコのエーゲ海沿岸のチャナッカレ地方に位置するアイヴァジク村やユントター村は、かつて遊牧民が定着化した地域で、もともと絨毯製作が盛んなところである。昔から伝えられてきたデザインと天然染料を使う手織り絨毯を復活させようというプロジェクトは、トルコ政府(イスタンブールの国立マルマラ大学芸術学部)とドイツ政府の技術協力・開発事業団の援助で一九八一年に始まった。それがいまでは村の女性たちが協同組合を組織して、染料植物の栽培から製織、製品の品質管理、輸出事務まで一貫しておこなうようになった。これほどの女性の社会的進出は、他のイスラーム諸国では考えられないことだ。組合員が織った製品には、実際に織った女性の名前、ノット(結び目)数、寸法、制作年代などを明記した保証書が付けられているが、これも他に類を見ない。ちなみに筆者はこの村



簡単に移動できる水平織(すいへいばた)で絨毯を織るカシュガイ族の女性たち



カシュガイ族の絨毯が集積されているイラン南部の町シーラーズの倉庫

に泊まり込んで、絨毯製作をつぶさに観察しながら、絨毯を多数収集することができた。

イランには、いまだに一定区間を移動して生活している遊牧民がいる。遊牧民というところからロマンを感じるかも知れないが、最近ではイラン南部のカシュガイ族の社会にも近代化の波が押し寄せ、移動にはラクタならぬトラックが使われている。彼らの生活は想像以上に豊かであるが、それは女性たちの織る絨毯が、本来の生業である放畜からの取入に劣らず重要な収入源になつているからである。市場原理は遊牧民のテントのなかでも働いていて、国内外から訪れる絨毯業者は売れ筋の近代的な感覚のデザインの下絵をもち込んで織らせているが、この状況はかなり前から続いているようだ。イラン南部の大都市シーラーズにある遊牧民の絨毯を専門に扱う業者の倉庫に山積みになつているのはこの種の絨毯である。これに対して片隅に置かれているのは、誰からも指導を受けずに遊牧民が自発的に織った染めも図柄も昔ながらの絨毯で、見るからに粗悪品といった感をまぬかれない。

中国産イランブランド

最近ではマーケットのグローバル化とともにさまざまな問題が噴出してきている。先に述べたように村の絨毯製作の成功の裡には政府のみならず村人自身の努力があったが、遊牧社会には伝統に固執する気配がもはや見られない。

都市で織られる絨毯には、ある種のブランドがある。つまり、特定の町で良質の素材を使い、優れたデザイン感覚をもつデザイナーや腕のあ



村のモスクには信徒が寄進したさまざまな色と図柄の絨毯が敷かれている

